1Ja-6

震災後の高齢者専用住宅居住者の生活行動とその支援活動
－兵庫県下のシルバーハウジングとインナーシティ住宅の場合－

○寺山知寿　菊澤康子　（兵庫教育大）

目的　阪神地区にある高齢者専用住宅入居者の震災時における行動特性については、その一部を昨年報告した。今回は被災状況及び入居者相互の安否確認や助け合い、外部からの支援活動についてその実態を明らかにし、今後のシルバーハウジング（以下SHと略す）やインナーシティ住宅（以下ICHと略す）など、高齢者集合住宅での生活援助サービス及び地域交流・支援のあり方等を、防災視点から検討することを目的とした。

方法　兵庫県下の5カ所のSHと神戸市下の9カ所のICHの全入居者各々145戸、130戸を対象に、平成7年2~3月に被害状況調査を、5月にアンケート調査を実施した。回収率はSHでは84%（120戸）ICHでは39%（51戸）であった。なお本調査は建築学会第6部会（代表者荒木兵一郎）のメンバーによる共同研究として筆者等が担当したものである。

結果　対象住宅の建物被害は一部分的で、構造上の危険性は見られなかったが、ライフラインの断絶により生じた生活困難は大きく、そのために避難した人もあった。しかし復旧までの水の運搬は、自分自身で行った人が57.6%と最も多く、支援としては親族からが18.6%、ボランティアからが15.7%で、居住者間の援助は8.7%であった。これはその他の支援活動についても同傾向が見られた。震災前の住宅内での交流は、一部の人とあった者が6割を占め、全員とあった者も17.4%見られたが、逆に殆どなかった者も9.9%あった点は問題と言える。震災後の交流に関しては、変化なしが42.4%で、あった者では、悪くなった変化（3.5%）よりも、良くなった変化（24.4%）の方が多く、また地域との交流は、重要視していることがわかった。